

眞昼のランプ

● 根岸草笛著

● ひかりのくに社

本書は著者自身が述べているように、「祈りを込めて学生と学生を愛する方々に捧げる」ために書かれたものである。ここで著者が実際に対象にしている学生は、やがて保育者になる方々であるところに、私はとくに意味を見出しているのである。というのはこの書の副題に「学生と学生を愛した人達の物語」とあるように本書の内容は、すべて著者が保育者を養成していた十

数年間の学生との美しい物語ばかりであるからである。

本書の著者根岸草笛女史（現在の山下俊郎氏夫人）はかつて日本保育学会の理事の一人であり、保育界、とくに保育所関係では指導的な立場にたっておられる方である。根岸女史は若き日から保母として出発し、やがて園長になり、そして児童福祉審議会委員、全日本保育連合副会長をもつとめ、広く保育界に貢献された方である。その貴重な体験と保育に関する識見とが高く評価されて、一躍長野県保育専門学院の初代の学院長に抜擢された。学園創設という激務、それに院長といういかめしい管理職にありながら、彼女が学生たちに対して、いかに楽しい学園生活を送らせるために心温まる細かい配慮までなされてきたか

は、この物語を読む方々の誰しもが深く感ずるところであらう。「親猿子猿と呼び合って暮した信濃路のメルヘンのお城のような小さな学園の、学生と教師の間に奏された真の学生讃歌」であるといっていることから察せられるように、著者の学生に対する愛、それに答える学生の師に対する敬慕の心が、本書に満ちあふれている。「私たちは、牧場の花が大地と親しいように、お互いに親しくつき合い、教師は学生の人間の開花に心を熱くして努め、本当に楽しく、そしてまた厳しく生活をともしました」このまえがきの著者の言葉を讀んだとき、これはまさに親心子心の教育を唱えていたペスタロッチの教育精神を、著者は自分の美しい学園で実践していると私は直観した。

『真昼のランプ』という題は、古代ギリシャの哲人ディオゲネスが、真昼に灯のともったランプを掲げて群集の中を歩きまわったという逸話からとったものである。なぜ真昼にランプなど掲げているかと聞かれてディオゲネスは「人間を探している」と答えたという。

根岸女史がこの話から本書の書名をとった意味もわからないことはない。本書の内容を読めばわかるように、いわゆる現代の大学生活には見られない師弟の信頼感や愛情がみなぎっており、人間的なあまりにも人間的なヒューマニズムやロマンティズムが学園全体を流れている。もちろんときにはセンチメンタリズムも感じさせられるが。そういう意味で本書は、わが国の大学紛争以来の師弟間の断絶、荒野のような学園、味気ない学園生活、悪しき合理主義や

実利主義でとりひきする単位取得などの現状に対する一服の清涼剤ではある。

本書の内容は、

I ユーモア教室

II 職員紹介

III 学園生活入門

IV ガイダンス

V ゼミナール

VI ケースワーク

VII 子どもたちとの触れ合い

VIII ボランティア活動

の八章からなっている。

どれを読んでも、ユーモアと機智、

かいぎやくや爆笑のうちに楽しくしかもきびしい授業やガイダンスが行なわれている。学生にやられる教授、逆に教授にやられる学生、その間の偽りなき人間同志のや

りとりなど、うるわしいほほえましい風景は読む人の心をなごやかにさせる。紙数の関係でくわしく内容を紹介することはできないが、とにかく本書は学生、そして青春期にある学生と応対している方々には、きわめて魅力的な内容に満ちている。このよ

うな学園生活を体験した保育者であれば、どうして幼児を単なるテストの対象として考えたり、幼児を自分の思い通りにひきまわしたりできるであろうか。

その意味で本書を、保育者をめざす学生や保育者を養成している方々のみならず、

広く現場の幼児教育者にもおすすめしたいものである。

